

# 新島七五三太の英語の語彙

三 好 彰

## はじめに

新島襄（幼名：七五三太）は、幕末期の士族の子がそうであるように幼少期に漢文の素読を身に付けた。新島遺品庫蔵の各種資料の随所に書かれている自作の漢詩が新島の漢語力の高さを忍ばせている。

新島は神田の生まれである。生家の近くに幕府の洋学校である蕃書調所があった。洋学者が行き交っていており、進取の気性に富む青年・七五三太は洋学に取り組む環境に居た。

七五三太はオランダ語の文法を学び、ついで数学、航海学を蘭書で学んだ。蘭学学習の様子は新島遺品庫にある膨大な資料から読み取れる<sup>1)</sup>。

蘭学に次いで文久3（1863）年から英語に取り組んだ。蘭学の場合と同じように英文法を学ぶことから始め、数学と航海学を英書で学んだ<sup>2)</sup>。

そして元治元年7月（1864年8月）に函館（当時は箱館）から西回りでほぼ一年がかりでアメリカに渡った。この間は英語漬けの毎日だったわけだが、船中で改めて英文法を学び、そして航海学を実践の場で磨きかけた。

本稿では船中での英語の学習振りを概観し、ボストン到着直後に書かれた「脱国の理由」<sup>3)</sup>「Why I departed from Japan」<sup>3)</sup>をもとに、七五三太の英語の語彙から、その典拠を考察する。

## 1. 船中で学び直した英文法

箱館からプロシャ船籍のベルリン号 The Berlin で脱国を果たした新島は上海でアメリカ船籍のワイルド・ローバー The Wild Rover 号に乗り換えてボストンに向かった。ボストンに到着した時に持っていた本を目録番号上

1066<sup>4)</sup>の画像番号 10690029 に書いている。その部分を切り出して図 1 に示す。

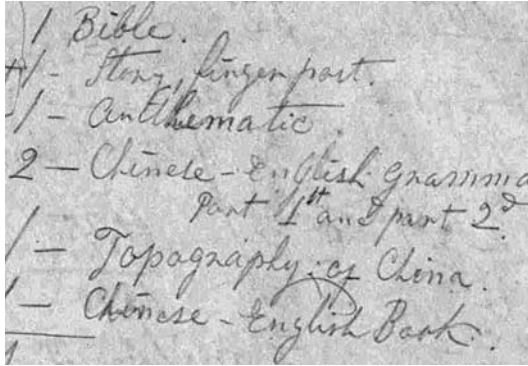


図 1 ポストン到着時に持っていた本

図 1 を翻刻すると次のようである。

- 1 Bible ;
- 1 Story, finger post ;
- 1 Arithmetic (sic.) ;
- 2 Chinese-English Grammar, Part 1<sup>st</sup> & Part 2<sup>d</sup> ;
- 1 Topography of China ;
- 1 Chinese-English Book

4 番目に書かれている *Chinese-English Grammar, Part 2<sup>d</sup>*<sup>5)</sup> は目録番号上 0843 にある下記の英文法書が該当する。

William Lobscheid, 『英語文法小引 *Chinese-English Grammar*』 PART II,  
Hongkong :  
Printed at Noronha's Office, 1864

この本は著者 Lobscheid に *Missionary to the Chinese* だと添え書きしている。

Lobscheid は同書の Part-I<sup>6)</sup>の序文で、本書の英文法は英国で刊行された Cornwell の *Grammar for Beginners*<sup>7)</sup>を使ったが一部に手を入れたこと、および広東語に依ったと述べている。広東語は漢字のほかにローマ字表記を併用している。それゆえ漢字に慣れていない人（外国人）が広東語を学ぶ一助にもなり得る。なお Part-I は新島遺品庫に見当たらない、散逸したようだ。

新島は少年期に素読を学んでいた。それは北京語だったろうが、素読の発音は日本流だったから広東語であまり問題なかったことだろう。

『英語文法小引』はアルファベットの読み方を漢字とローマ字で示すことから初めて英文法を一通り説いている。新島は単語の意味と発音を持っていた辞書<sup>8), 9), 10)</sup>で確認しながら学んでいる。また穴埋め問題の解答ぶりからも新島の語彙の一端を知ることができる。

## 1.1 演習問題の取り組み状況

『英語文法小引』は随所に演習問題が用意されている。新島遺品庫に現存する Part-II に新島が答えを書き込んでいる箇所があり新島の理解度が垣間見える。新島が書き込みをしている箇所などを主として語彙の観点で考察する。課題の文が出ている Part-II の該当ページ番号も示す。

### (a) Page-4 形容詞の問題

課題の文：Tell the Adjectives in the following sentences, and their degrees of comparison :

13 個の問題の文がある。その中に出ている形容詞を示し、それが原形、比較級、最上級のどれに当るかを指摘する問題である。

新島は答えを書いていない。既に理解できていたからであろう。ところで問題が広東語でも書かれており、それを見れば答えが分かる。その例を示すと次のようである。

The stars are bright ;	天星係光
The moon is brighter ;	太陰係更光
But the sun is brightest.	惟熱頭係至光嘅咯

原形 bright の広東語訳が光であり、比較級には更が付き、最上級には至が付く。つまり広東語を見れば答が分かるので英語の勉強にならないことに新島は気が付いていたようだ。

(b) Page-10 関係代名詞

新島が江戸で学んだ英文法を「英吉利文典直訳」として書き残している<sup>11), 12)</sup>。英語に取り組んだ最初のことなので無理はないが訳文の随所に苦勞の跡が見える。中でも関係代名詞の扱いに戸惑っている。その 1 例を次に示す。

The sovereign who rules absolutely over his subjects, is often, alas! capricious and tyrannical.  
 王其ハ彼ノ旨ニ付テ自在ニ支配スル処ノ 王ハ屢ニサテモサテモ片意地而猛悪デアル

関係代名詞 who の扱いに窮しており、邦訳文として完結していない。  
 関係代名詞 who の『英語文法小引』における用例の 1 つを英文と広東語文で以下に示す。

He was a brave man who stopped the horse which ran away.  
 捉倒走去个匹馬嘅係大膽嘅人

漢文が読めた新島は、両文を読み比べて関係代名詞 who の使い方、訳し方が一目瞭然に分かっただろう。ところで新島はこの文の brave に「勇ナル」と書き込みをしている。この邦訳は『英和对訳袖珍辞書』の訳語に符合する。筆者は新島が渡米時に『英和对訳袖珍辞書』を持っていたことを明かに

したが、その実例である<sup>13), 14)</sup>。

(c) Page-30 動詞の時制

課題の文： Tell the Tense of the following Verbs :

動詞の時制に関する 14 個の問題の文があり、新島はそのうちの 9 つに正しい答えを書いているが、5 つは間違えている。間違えている 1 つ目は次の問題である。

He will see you at Christmas.

新島の答えは“Past”、つまり過去であるが、正しくは未来形である。

広東語訳は「耶蘇聖誕個日佢必見你」である。耶蘇、つまりキリストの聖誕（生誕の意味）なので、過去の出来事と早とちりしたようだ。

答えが未来形である課題文がこのほかに次のように 2 つある。

In ten minutes you will be out two hours.

We shall sail next week.

この場合、上の文の新島の答えは Future と正解を書いているが、下の文に答えを書いていない。どうやら時制の意味が十分には理解できていなかったようだ。

(d) Page-52 動詞の穴埋め問題

課題の文： Supply proper Verbs.

最初の問題は次の通りであり、新島は答えを is と正しく書いている。

The book ( ) in the box.

比較的簡単な文が続き新島は正しく答えているが、次の問題にてこずっている。

We ( ) fond of fish

新島は答えを have としている。慣用句 be fond of を知らなかったのが分かる。もっとも『英語文法小引』の Part-I, Part-II のどこにも be fond of が出していないので新島は責められまい。

もう一つ戸惑っているのが次の問題である。

You ( ) better than I ; but I ( ) better than he.

新島の答えは read である。穴埋め問題の回答として read でよさそうに見える。しかし広東語訳は「你係好過我但係我係好過佢」であるから本を読んではいない。これによれば答えは次のようになろう。

You are better than I ; but I am better than he.

(e) Page-53 動詞の穴埋め問題

課題の文 : Supply appropriate Verbs :

主語が and で結ばれた2つあるケースである。問題文は6つある。新島の答えで疑問があるのは下記の一文だけである。

The cat and the dog ( ) with each other.

新島の答えは sleep である。広東語訳は「个隻猫同个隻狗反」であって猫と

犬は寝ておらず、いがみ合っているので次の方がよからう。

The cat and the dog quarrel with each other.

なお Page-57 にも穴埋め問題があるが、『英語文法小引』に落丁があつて課題文が落ちている。『英語文法小引』の原典である Cornwell の書<sup>7)</sup>によれば課題の文は Supply the proper Verbs : である。この課題の文があれば新島はこの問題に取り組んだことだろう。

(f) Page-69 代名詞の穴埋め問題

課題の文 : Supply proper Pronouns ;

代名詞に関する 9 つの問題の文がある。新島が間違えているのが 2 つある。その 1 つ目は下記の文である。

Tell Emma. ( ) is wanted.

新島の答えは he であるが、Emma は女性の名前だから正解は She である。この問題の広東語訳は「話 Emma 有人使佢」であり、( ) に該当するのは「佢」であるが、佢は男性、女性どちらにも使われる。つまり広東語では男女の区別をしないので新島が惑わされたわけである。

2 つ目は次の文である。

Did you send the parcel? Yes, ( ) went by railway.

新島は答えを書いていないが you に問いかけているから答えは I である。ただし、この 2 つの文をつなげて考えるのはやや難があるように思える。つまり「荷物を送ったか」との問いかけに対して、「私は汽車で行った」と答えていて素直に話につながりにくい。一種のひっかけ問題であつて新島が引

っ掛かったわけである。

なお新島は railway の意味と発音を持っていた Walker の辞書<sup>10)</sup>で確認している。発音記号は Walker の辞書に書かれている通りだが、ここでは省く。意味について新島は次のように書いている。

Railroad or Railway ; a line of road laid with iron rails, on which carriages are conveyed by steam.

Road ; an open way for travelling, a path.

Path ; a way, a tract

Railroad ばかりでなく、Road さらには Path の意味も Walker の辞書で調べている。海の上に居たから road, path に出くわさなかったわけである。

ちなみに『英和对訳袖珍辞書』では Railroad, Railway で 1 つの見出し語になっていて、その意味は「火輪車ノ道」である。新島には「火輪車ノ道」では分からないので Walker の辞書を引いたと考えられる。

(g) Page-73 副詞の穴埋め問題

課題の文 : Supply proper Adverbs ending in ly :

( ) に語尾が ly の副詞を入れる 10 個の問題である。新島の語彙を知ることができる好例なのですべての問題を取り上げる。英文だけでは解けないので広東語文を併記する。

新島が答えを書いているのは以下の 7 つである。右端が新島の答である。

The bird sings ( ).	呢隻雀唱得好	delightfully
Try to speak ( ).	你試講好明白	distinctly
Do you love me ( ).	你熱心愛我有呢	heartly
Does she not act very ( )?	佢做事豈非愚蠢乎	carefully
He sees ( ) now.	佢而家見得好明白咯	distinctly



This man works ( ).                      呢個人係勤力作工                      strongly  
 That man travels ( ).                      個個人行快的                              quietly

答の一部に疑問が残るが、結構難しい副詞が使えるようになっていたのが分かる。なお上から3番目の新島の答えは heartly だが heartily の i をうっかり書き落としている。

新島が答えを書いていないのは次の3つである。

The soldiers fought ( ).                      个的兵人奮勇打仗  
 He has managed his affairs ( ).                      佢辦佢嘅事着咯  
 We live ( ) together.                              我的樂心同埋住

最初の“The soldiers...”については、広東語文にある「勇」をヒントにして上記 (b) に記したことを敷衍すれば bravely の答えが得られたはずである。他の二つにはヒントになる英文が『英語文法小引』に見当たらないので、答えられなかったのはやむをえない。

(h) Page-77 最後の穴埋め問題

課題の文：Supply the appropriate words.

すべての問題を取り上げる。英文だけでは解けないので広東語文を併記する。右端に新島の答えを示す。

The basin was ( ).                              呢面盤被人打爛                              broken  
 This stone has been ( ).                              呢塊石被去泵                                      thrown  
 He ( ) his lesson.                              佢學過佢課                                      has learned  
 The bird has ( ) over the house.                              呢隻雀飛過个間屋                                      flown  
 I have ( ) ten miles.                              我曾騎馬十里之遠                                      ridden  
 He ( ) away.                                      佢走去    runs

The lady ( ) that song sweetly.	个个夫人唱个歌係十分好聽	sings
He ( ) me a letter.	佢俾封信過我	sends
I have not ( ) him.	我唔曾見佢	seen
I have not ( ) to him.	我唔曾寫信俾過佢	
I have not ( ) my dress.	我唔曾著我件衫	worn

答の中に時制を取り違えているのがある。それはともかくとして上記の動詞が身につけていたのが分かる。

なお上記の中で答えを書いていないのが1つだけある。それは“I have not ( ) to him.”であるが、その答は written である。この問題の直前に不規則動詞の表が出ているので、この広東語訳と不規則動詞の表を見れば答えが得られる。新島は、このヒントに気が付かなかったようだ。

## 1.2 まとめ：新島七五三太と『英話文法小引』

『英話文法小引』の最後のページに新島は次のように書いている。

I have finished to read this book at 31<sup>st</sup> March.

年号が書かれていないが船上なので 1865 年であり、箱館を出てから 10 か月経っている。この間は英語漬けの毎日だった。

ところでアメリカの新聞が伝えているワイルド・ローバー号の航行情報によると、3月21日にマニラに到着<sup>15)</sup>した。そしてマニラを経てボストンに向かったのは5月4日<sup>16)</sup>なので新島はマニラで『英話文法小引』を読み上げた。なおマニラの前の寄港地は香港<sup>15)</sup>なので中国近海に10か月も居たから漢書を買う機会が何度もあった。

さて新島は動詞の受動態・能動態、不定法、分詞などに関する課題文にほとんど手を付けていない。つまり書き込みが無い。どうやら新島はこれらのことが十分には理解できなかったようだ。「脱国の理由」の英文に、これらに関して問題があることは繰り返すまでもない。

とはいえ穴埋め問題に見られるようにかなりの語彙を身に付けていること

が分かる。

なお漢文に惑わされている書き込みが見られる。『英語文法小引』の漢文は北京語でなく、広東語であるため新島が読みこなせなかったためかもしれない。

ところで図1の *Topography of China*<sup>17)</sup> は出版時期から判断して下記の書と考えられる。

Williams, S. Wells (Samuel Wells), *Topography of China and neighbouring states: with degrees of longitude and latitude.*, Hongkong: Printed at Noronha's Office 1864

本書の復刻版が出ているが、中国とその周辺の海浜都市の経緯度の表である。中国近海に10か月居たから必要になって購入したようだ。語彙の観点では新島はこの書から学ぶことは多くなかったことだろう。

## 2. 航海の記録

新島遺品庫に目録番号上 0844 の資料がある。その表題は「数学ノート (Febr. 16<sup>th</sup> Day of 1865 of China Sea)」である。この資料に書かれている記事の概要を述べる。

### (a) クロノメーターの使い方

画像番号 10844002 の右端最上部に (東) シナ海上として日付が次のように書いてある。

Feb. 16<sup>th</sup> day of 1865 at China Sea

上述したようにワイルド・ローバー号はこのとき中国近海を航行していた。

画像番号 10844002 の左端に *The time of chronometer* (筆者注: クロノメーター (経線儀) の示す時刻) とあり数式が並んでいる。

新島は江戸で Bowditch の航海学書<sup>2), 18), 19)</sup>を学んでいた。この本を中濱万次郎が訳して『亞美理加合衆国航海學書』<sup>20)</sup>にまとめており、新島がその一部を写し取っている。また万次郎とは違うやり方で問題を解いている箇所もある<sup>2)</sup>。

そして『航海日誌』<sup>4)</sup>の書き出し部で述べているように新島は中濱万次郎に疑問点をただしに行こうとしていた。つまり二人は交流があった。

クロノメーターは世界標準時であるグリニッジとの時間差から経度を求める器具だが、海上の位置によって誤差が生ずるのでその補正をする必要がある。その補正のやり方を新島は蘭書<sup>1)</sup>と英書<sup>8)</sup>で学んでいた。新島はワイルド・ローバー号上で実務に供した。それが新島遺品庫蔵目録番号上 0844<sup>21)</sup>のこの資料である。

この資料には日々の補正の様子が書かれている。つまり一種の海洋日誌である。Bowditch の航海学書<sup>18), 19)</sup>に海洋日誌の書き方についての記述があるが、その部分を万次郎は訳していないし新島は学んでいない。テイラー船長に実地教育を受けたのだった。

## (b) Middle Latitude Sailing

画像番号 10844003 の右端に書き込みがある。それを翻刻して図 2 に示す。

此 チ パ チャ ヲ 以 折 中	緯 度 の ラ チ チ ユ ー ド の	コ ロ ム ン 相 当 は ヂ ス タ ン	ス コ ロ ム ネ の 者 を 取 り	以 経 度 の 変 位 を 知 る。
---------------------------------------	--	---	--	--

図 2 翻刻文

図 2 でチパチャは departure、ラチチュードは latitude、コロムンは column、ヂスタンスは distance である。

この翻刻文は Middle Latitude Sailing (万次郎の訳語では緯度中分走方、

現代の訳語では中分緯度航法)を By Inspection (万次郎の訳語では捷算法: 巻末の表を使って近似解を得る方法)で解く要点を述べたものである。すなわち船がある地点から別の地点まで移動したときの距離を算出するのに、両地点の経度の中間地点に沿って船が南北に移動したと見なして近似解を得る方法である。ここで巻末の表とは TABLE II. Difference of Latitude and Departure for 1 Degree~45 Degrees のことだが、新島にとっては自明なので図 2 では省いている。この表を使えば面倒な計算をしないで近似解が求められる。つまり、この表から該当する latitude の column と distance の column を見つけ出せば departure (新島の訳では「経度の変位」、現在の訳語では東西距離)が求まる。アメリカの船がやっているとして万次郎はこの捷算法を推奨している<sup>22)</sup>。

### (c) 船の操縦

画像番号 10844015 は 5 月 11 日の記事である。マニラを経ってから 1 週間目である。右辺に地球の図があり、英語で Tropic of Cancer (北回帰線) & Tropic of Capricorn (南回帰線) と書いてある。そして多くの英文が書かれている、その一部を以下に示す。

I want to go to turn West.  
 Variation is 1 point W.  
 I must keep course W & N.  
 Variation is 2 point W,  
 Wind NNW, 1 point leeway.  
 I must steer NW & W.

西に行きたいのだが風に流されているので方角を変えるように舵取りせねばならないと主語 I で述べている。それゆえ新島は船の操縦を任されていたのだ。

上記の英文の point は羅針盤についている方位を示す番号である。それを含めて新島は航海に関する語彙を巧みに使いこなしている。Bowditch の航

海学書を理解している新島に操縦を任していたことから、テイラー船長が新島を高く評価していたことが伝わってくる。

### 3. 「脱国の理由」に見る新島の語彙

「脱国の理由」“WHY I DEPARTED FROM JAPAN”に出ている英単語の典拠を考察する。最初の文は下記である。

I was born in a house of a prince [Itakura] in Yedo.

この英文には固有名詞を除いて 8 種で 10 個の単語が使われている。新島の英語の語彙を考察するうえでは、初期の段階で身に付けたと見なせる代名詞、冠詞、前置詞を除いてさしつかえあるまい。そして動詞を原形で示すと、この場合で考察の対象になる単語は be, bear, house, prince の 4 種である。

「脱国の理由」全体では、単語の延べ数は約 2,500 語であるが、代名詞、冠詞、前置詞を省くほかに動詞や形容詞などは原形に絞ることにして、英単語の種類は管見で 350 種である。その典拠を考察する。

#### (a) 江戸で読んだ英書の語彙

新島が江戸で学んだ英書で書名がわかるのは次の通りである。

- 「英吉利文典直訳」の典拠である Walker's 辞書の“INTRODUCTION TO THE ENGLISH GRAMMAR AND LANGUAGE”の項<sup>8), 11), 12)</sup>
- Docharty 著 “THE INSTITUTES OF ALGEBRA”<sup>8), 23)</sup>
- Bowditch 著 The new American practical navigator<sup>18), 19)</sup>

「脱国の理由」に出ている単語 350 種の内、これら 3 つの本に出ているのは 130 種である。よって残りの 220 種の英単語は日本を出てから身に付けたわけである。

なお Docharty の書と Bowditch の書で新島が学んだのは本全体ではなくほぼ半分なので新島が学んだ箇所の単語に限定して勘定した。

(b) 『英話文法小引』で身に付けた語彙

上述したように新島はボストンへ向かう船上で Lobscheid 著『英話文法小引』 Part-I, Part-II を読み上げた。

「脱国の理由」の単語の内の 160 語が『英話文法小引』に出ている。その中で上記 (a) に含まれていないのが 80 語ある。そのうちの 5 語を参考までに以下に記す。

depart, library, pig, shine, step into

(c) 洋上で読んだ小説

図 1 に示したように新島がボストン到着した時に持っていた本に *Story, finger post* がある。本書は当時アメリカで広く読まれていた下記の本と考えられる<sup>24)</sup>。

Timothy Shay Arthur, *FINGER POSTS ON THE WAY OF LIFE*, Boston : Philadelphia, 1853

著者 Timothy Shay Arthur は Edgar Allan Poe の親友であり人気作家であった。本の表題は人生の指針 *finger posts* である。指針とは信仰であり、この本の序文で次のように述べている。

The author is never unmindful of the fact, that all natural life is for the sake of spiritual life, and that no one can live well in the true sense, who does not live for Heaven.

著者は熱心な禁酒主義者であった。後年の新島を考えると、新島はこの本に感銘を受けたと考えられる。ひょっとするとテイラー船長が新島にこの本を

勧めたかもしれない。

この本の本文は 205 ページである。市井生活がテーマであり、比較的わかりやすい文章である。英語の初学者だった新島にとって取り組みやすかったであろう。

この本に「脱国の理由」の単語の内の 260 語が出ている。その中で上記 (a), (b) に含まれていないのが 80 語ある。そのうちの主な 5 語を参考までに以下に記す。

create, firmament, measles, murmur, poor-house

firmament, measles などは新島が船上生活の中で交わした会話に出てきたとは考えにくい。本書で初めて出会った単語と思える。

(d) ロビンソン・クルーソーの本

新島はボストンに到着してすぐにロビンソン・クルーソーの本を一ドル半で買ったと目録番号上 1066 の航海日記に書き残している。

刊行年に少し差があるが、1873 年に出た *The Publishers Weekly*<sup>25)</sup> 誌に次の記事がある、値段が新島の買値と同じである。

Robinson Crusoe, Defor, D., Rutledge, \$1.50

この本のより詳しい書誌情報は次の通りである。

Daniel De For, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe, with a Portrait; and one hundred illustrations* by J. D. Watson, London: Routledge, Warne, and Routledge, Farringdon Street; and Walker Street, New York, 1864

同じ 1864 年にボストンで刊行された下記の本も候補になる。



*Life and Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, with an Account of his Travels round Three Parts of the Globe, written by Himself; with New Designs on Wood by Anderson, Boston: Crosby and Nichols, 1864*

ロビンソン・クルーソーの出版史を記した本<sup>28)</sup>には、このほかの本も出ているが、新島が到着する前に出た本でアメリカの出版社が絡んでいるのはこの2冊である。本稿では両書に絞って考察する。

2冊のうち、前者はロンドンとニューヨークの出版社で印刷されたので、ここでは参照の便宜上 Crusoe (NY)<sup>26)</sup>と略す。後者はボストンの出版社なので Crusoe (BOS)<sup>27)</sup>と略す。

Crusoe (NY) は本文の前に Memoir of De Foe と題して8ページにわたり著者の伝記が書かれている。ついで目次が3ページ、挿絵の目次が2ページある。本文は498ページであって、巻末の2ページに本の広告欄がある。

Crusoe (BOS) は序文も目次も広告も無い。文字のフォントが Crusoe (NY) より大きく本文は586ページもある。著者を Himself、つまり Robinson Crusoe だとしている。

Crusoe (NY) と Crusoe (BOS) には表現にちょっとした違いが散見されるものの書かれている内容は同じである。表現の差の一例を下記に示す、アンダーラインを付した部分に両書で差がある。

Crusoe (NY) : Sure we are all made by some secret power, who formed the earth and sea, the air and sky.

Crusoe (BOS) : Surely, we are all made by some secret Power, who formed the earth and sea, the air and sky.

ここでは Crusoe (NY) と Crusoe (BOS) を語彙の観点で比較する。

#### (イ) 英国英語綴り、米国英語綴り

英語の綴りが Crusoe (NY) は英国英語流であり、Crusoe (BOS) は米国英語流である。「脱国の理由」に出ている該当の単語を Crusoe (NY) : Crusoe (BOS) の順に記すと次のようである。

harbour : harbor, labour : labor, neighbour : neighbor, saviour : savior

「脱国の理由」の綴りは harbor, labor, neighbor, saviour であり、saviour 以外が現在の米国英語流である。

なお後年のことになるが新島は 1874 年のアメリカン・ボードの総会で歴史に残る有名な演説をしたが、それを伝える現地の新聞の記事<sup>29)</sup>によれば言い出しの文に次のように saviour が出ている。

In the parting of the Saviour with his disciples he commanded them to go forth and preach his Gospel.

当時はアメリカでこの綴りが使われていたのが分かる。なおこの記事を翻刻されたケーリ先生は savior と現在の米国流の綴りに変えておられる<sup>30)</sup>ことを念のために記す。

(口) **Crusoe (NY)** と **Crusoe (BOS)** で出入りのある単語

「脱国の理由」の単語で Crusoe (NY) に出ていて Crusoe (BOS) に出ていないのは次の通りである。

foreigner, healthful, peaceful, vainly, writer

なお healthful は本文中には出ておらず広告欄にだけ出ており、foreigner と vainly は本文の前に書かれた Memoir of De Foe にのみ出ている。そして Crusoe (BOS) は peaceful ではなく同義語の peaceable を使っている。

Crusoe (BOS) に出ていて Crusoe (NY) に出ていない単語は pig だけである。なお Crusoe (NY) では pig ではなく sow (雌豚) を使っている。

ここでアンダーラインを付した 4 語 (foreigner, vainly, write, pig) は、上述した他の典拠の書物にも出ている単語である。つまりこれら 6 語のなかで他の典拠の書に出ていなくてロビンソン・クルーソーの本にだけ出ているのは Crusoe (NY) に出ている healthful, peaceful の 2 語である。ただし healthfully と peacefully が (c) で述べた小説 *FINGER POSTS ON THE WAY*

*OF LIFE* に出ているので、この時に新島は *healthful* と *peaceful* を覚えたと考えられる。

ということから「脱国の理由」に関する単語に関して *Crusoe* (NY) と *Crusoe* (BOS) とに有意差はない。

(ロ) に関して *Crusoe* (NY) と *Crusoe* (BOS) とは同等であるが、(イ) から新島が買ったのは *Crusoe* (BOS) と考えられる。

ところで *Crusoe* (BOS) の出版社 Crosby and Nichols はボストンの Washington Street の 117 番地にあった<sup>31)</sup>。新島が Washington Street の書肆で買った<sup>32)</sup>ことも考慮してロビンソン・クルーソーの本は *Crusoe* (BOS) であると考ええる。

さて「脱国の理由」の 350 の単語の内の 305 語が *Crusoe* (BOS) に出ている。比率では 87% 強である。「脱国の理由」を書いたのは *Crusoe* (BOS) を読み終えて間もない時であった。そして新島が大きな刺激を受けたことが数値の上でも明らかにできた。

#### (e) 典拠不明の英単語

上述のことからロビンソン・クルーソーの本を *Crusoe* (BOS) として、(a) から (d) で「脱国の理由」の英単語数 350 語の内の 334 語<sup>33)</sup>の典拠が分かった。比率では 95% 強である。

上述した典拠に出ていないのは残りの 16 語である。その中で先ず気になるのはキリスト教関係の次の 4 語である。

Godless, Heavenly father, Holy Bible, Holy Ghost

航海日記の画像番号 10660015 に「(元治元年) 八月九日 (筆者注: 1864 年 9 月 9 日) 甲比丹予にバイブルを与り」とある。このバイブルから得た言葉であろうか、あるいはテイラー船長との会話を通して覚えたのかもしれない。

ところで新島は『英語文法小引』を学んだので派生語についての知識があ

ったと考えられる。下記の3語は（ ）内に示す関連する語が上記の典拠の書に出ているので新島は作り出せたと考えられる。

Expostulation (expostulate), healthfulness (healthful), stableness (stable)

下記の2つの合成語についても新島は作ることができたと見なしてよからう。

machine-working, writing-master,

残りは下記の7語であるが、これらは上記の典拠の書に見られない。しかし海洋関係の単語などは箱館を出てから1年ばかりの英語漬けの生活の中で身に付けていたと考えてよいだろう。

atlas, grandfather, marine, president, rat, schooner, some day,

(f) 補遺：洋上で読んだもう1冊の本

洋上で読んだもう1冊の本とは図1にある Chinese English Book である。候補になるのが大英図書館蔵の1860年代に出た『論語』や『大学』などの中国の古典を英訳した一連の本である。その書名は次の通りである。

James Legge, *Chinese Classics, with a translation critical and exegetical notes, prolegomena, and copious indexes in seven volumes*, Hongkong: At the Author's; London: Turner & Co., Paternoster Row. 1861-1872

全7巻のうちの1冊を新島が買った可能性がある。

上記(e)で述べた最後の7語の内のいくつかは、その本で学んだかもしれない。たとえば第一巻<sup>34)</sup>だとすると grandfather と president が確認できるが、ここでは可能性があることを示すにとどめる。

## 4. 「脱国の理由」の七五三太の思い

繰り返しになるが新島は渡米時に『英和对訳袖珍辞書』を持っていた。初めて出会った英単語の意味をこの辞書で確認していたことが、処々に残っている書き込みで分かる。「脱国の理由」の英文を『英和对訳袖珍辞書』の訳語で邦訳すると、往時の新島の真情に近づくことができよう。一例として「脱国の理由」の締めくくりの部分英和对訳で以下に示す。

<p>Now I know the ship's owner, Mr. Hardy, may send me to a school, and he will pay all expenses. When I heard first these things from my captain my eyes were fulfilled with many tears, because I was very thankful to him, and I thought too; God will not forsake me.</p>	<p>船の持ち主、ハーディー君、吾を稽古所に贈り、及び全き出銀を払い得ると吾は今解する。吾ガ最初に此の事を吾が船将より聴糺す時に吾が眼多くの涙を以て満たしめたり、吾は彼に甚だ忝きが故なり。而して吾は亦、神は吾を見捨てぬと思ふた。</p>
---	--

新島はテイラー船長に感謝を捧げている。新島はこの直後にフィリップス・アカデミーで学ぶが、同校はアメリカで屈指の進学校である。新島がこの学校の授業についていけることが分かっていたのは船上で新島の英才振りを知ったテイラー船長にほかならない。

### まとめ

新島は箱館から中国経由でボストンに渡った。その船上での英語の勉強ぶりを新島の書き残した記事から考察した。英文法の理解は合格点ぎりぎりのところであろうか。英語の語彙はかなり身に付けていたと考えられる。

ボストン到着後に新島が書いた「脱国の理由」“Why I departed from Japan”に出ている語彙を分析して、洋上で読んだ本（小説）とボストン到着

後に読んだロビンソン・クルーソーの原本をほぼ明かにすることができた。

摺筆にあたり、目録番号上 1066 の画像番号 10690029 の影印を図 1 に引用させていただいた同志社大学社史資料センターに感謝の意を表す。

#### 参考文献と注

- 1) 三好彰「新島襄の蘭学」、『新島研究』第 111 号（同志社社史資料センター、2020 年）、pp.59-85
- 2) 三好彰「新島襄が英書で学んだ航海学」、『関西英学史研究』第 12 号（近刊）（日本英学史学会関西支部、2020 年）
- 3) 新島襄全集編集委員会編、『新島襄全集』7（同朋舎、1996 年）、pp.3-7
- 4) 新島襄、『航海日記』（新島遺品庫資料上 0660）
- 5) William Lobscheid, 『英語文法小引 *Chinese-English Grammar*』PART II, Hongkong : Printed at Noronha's Office, 1864（新島遺品庫資料上 0843）
- 6) William Lobscheid, 『英語文法小引 *Chinese-English Grammar*』PART I, Hongkong : Printed at Noronha's Office, 1864
- 7) Lobscheid は書誌情報を示していないが、刊行年の近い下記が候補である。  
Alexander ALLEN; James CORNWELL, Ph. ; *Grammar for Beginners : being an introduction to Allen & Cornwell's English School Grammar*, Twenty-fifth edition, 1855
- 8) 三好彰「新島襄の英学事始め」『新島研究』第 110 号（同志社社史資料センター、2019 年）、pp.101-119
- 9) 堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』（江戸：洋書調所、文久 2（1862）年）
- 10) Peter Austin Nuttall, *Walker's Pronouncing Dictionary of the English Language : in which the ACCENTUATION, ORTHOGRAPHY, AND PRONUNCIATION OF THE ENGLISH LANGUAGE ARE DISTINCTLY SHOWN, ACCORDING TO THE BEST AUTHORITIES; AND EVERY WORD DEFINED WITH CLEARNESS AND BREVIETY. CRITICALLY REVISED, ENLARGED, AND AMENDED, TO WHICH IS PREFIXED AN INTRODUCTION TO THE ENGLISH GRAMMAR; WITH TREATIES ON THE ORIGIN, CONSTRUCTION, DERIVATION, ORTHOGRAPHY, AND PRONUNCIATION OF THE LANGUAGE*, Routledge, Warne & Routledge, 1859
- 11) 新島襄「英吉利文典直訳」（新島遺品庫資料上 0841）
- 12) 三好彰「新島襄『英吉利文典直訳』の英和对訳版」、『東日本英学史研究』第 18 号（日本英学史学会東日本支部事務局、2019 年）、pp.78-93
- 13) 上記 8), p.112-114

- 14) 三好彰「渡米時に『英和对訳袖珍辞書』を持っていた新島襄」『東日本英学史研究』第19号（日本英学史学会東日本支部事務局、2020年）、p.123
- 15) *New York Herald*, Foreign Ports, May 18, p.8, 1865
- 16) *New York Herald*, Foreign Ports, June 30, p.8, 1865
- 17) Williams, S. Wells (Samuel Wells), *Topography of China and neighbouring states : with degrees of longitude and latitude.*, Hongkong : Printed at Noronha's Office 1864
- 18) Nathaniel Bowditch, *The New American Practical Navigator being an Epitome of Navigation ; containing all the tables necessary to be used with the Nautical almanac, in determining the Latitude and the Longitude by Lunar Observations ; keeping a Complete Reckoning at Sea ; illustrated by Proper rules and Examples : the whole exemplified in a Journal, kept from Boston to Madeira, in which all the rules of navigation are introduced ; also, the demonstration of the usual rules of trigonometry ; problems in mensuration, surveying, and gauging ; dictionary of sea terms ; and the manner of performing the most useful evolution at sea*, 1844
- 19) Nathaniel Bowditch ; Jonathan Ingersoll Bowditch ; William Hooker, *The new American practical navigator : being an epitome of navigation ; containing all the tables necessary to be used with the nautical almanac in determining the latitude, and the longitude by lunar observations, and keeping a complete reckoning at sea ; illustrated by proper rules and examples . . . dictionary of sea terms : and the manner of performing the most useful evolutions at sea : with an appendix, containing methods of calculating eclipses of the sun and moon, and occultations of the fixed stars*, New-York : Published by E. & G. W. Blunt, proprietors . . . Stereotyped at the Boston Type and Stereotype Foundry, 1847
- 20) 三好彰「中濱万次郎が訳した航海学書の考察」、『英学史研究』第52号（日本英学史学会、2019年）、pp.1-18
- 21) 新島襄、「数学ノート（Feb. 16<sup>th</sup> day of 1865 at China Sea）」（新島遺品庫資料上 0844）
- 22) 上記20) の p.10
- 23) 新島襄、Elements of Algebra（新島遺品庫資料上 0828, 0849, 0828）出典：GERARDUS BEEKMAN DOCHARTY, *THE INSTITUTES OF ALGEBRA BEING THE FIRST PART OF A COURSE OF MATHEMATICS, DESIGNED FOR THE USE OF SCHOOLS, ACADEMIES, AND COLLEGES*, NEW YORK : HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS, 1852 注：図1に示したボストン到着時に新島が持っていた Arithmetic (sic) の本は、この本だと考えられる。

- 24) Timothy Shay Arthur, *FINGER POSTS ON THE WAY OF LIFE*, Boston : Philadelphia, 1853
- 25) *The Publishers Weekly*, Publishers' Board of Trade (U.S.) ; Book Trade Association of Philadelphia. ; American Book Trade Union. ; Am. Book Trade Association., New York : F. Leypoldt, p.597, 1873
- 26) Daniel De For, *The Life and Adventures of Robinson Crusoe, with a Portrait ; and one hundred illustrations* by J. D. Watson, London : Routledge, Warne, and Routledge, Farringdon Street ; and Walker Street, New York, 1864
- 27) *Life and Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner, with an Account of his Travels round Three Parts of the Globe*, written by Himself ; with New Designs on Wood by Anderson, Boston : Crosby and Nichols, 1864
- 28) William Supplee Lloyd, *Catalogue of various editions of Robinson Crusoe and other books by and referring to Daniel Defoe*, Library of William S. Lloyd, Germantown, Philadelphia, pp.23-24, 1915
- 29) American Board of Commissioners for Foreign Missions, — The Last Day's Proceedings. — Interesting Farewell Meeting, *The Rutland Daily Globe Saturday Morning*, Page 2, October 10, 1874
- 30) オーテス・ケーリ「ラットランドと新島襄と同志社」、北垣宗治編『新島襄の世界 永眠百年の時点から』（京都：晃洋書房、1990年）、pp.199-220
- 31) Crosby & Nichols. *Wholesale & retail booksellers and stationers, 117 Washington Street Boston*, Boston : Publisher unidentified, 1862-1865
- 32) 布施田哲也「虎口からの脱出」『新島研究』第104号（同志社社史資料センター、2013年）、p.34、注：新島は Washington Street の283番地に現存する The Old Corner Bookstore という本屋でロビンソン・クルーソーの本を買った。この本の出版社 Crosby & Nichols 社は100メートルばかり離れたところにあった。
- 33) 注：例えば (b) で例示した5語は (c), (d) に出ておらず、(c) で例示した5語は (b), (d) に出ていないので、単純計算では334語は出てこないことを断っておく。
- 34) James Legge, *The Chinese classics with a translation, critical and exegetical notes, prolegomena, and copious indexes/Vol.1, Confucian analects, the great learning, and the doctrine of the mean*, Hongkong : at the author's ; London : Trübner & Co., 1861